

縁をひろげ、運を授かる

荒川化学工業株式会社
取締役社長

谷 奥 勝 三

荒川化学工業は、創業明治9年（1876年）で、今年で138年の歴史を迎える会社でありながら、いわゆるB to Bの化学品中間体メーカーであり、一般的には知名度が低いのではないかと思います。荒川化学の「荒川」とは、東京の荒川区の荒川とたまに間違われますが、当社創業家の苗字です。初代荒川政七が、ロジン（松脂）やテレピン油を商う生薬商として創業し、今からちょうど100年前の大正3年（1914年）にロジン関連製品の製造を開始して、製造業への転進を果たしました。ロジン（松脂）の採集法は、天然ゴムと同様に松の木の表面に傷をつけて、滴り落ちる樹液を精製して得られる黄褐色の固体樹脂であり、野球のピッチャーがボールの滑り止めに使う「ロジンバッグ」の中の粉末が有名です。そのロジンには、ねばねばする粘着性や水をはじく撥水性があり、その特性を生かして粘着・接着剤の添加剤や、紙を製造する際にパルプ原液に添加して印刷時のインキの滲み止め、印刷インキ用の添加剤として使用され、顔料とのなじみがよく印刷物の光沢アップやインキと紙との密着性を良くするために必ず使われています。

私は、1979年に大阪大学大学院工学研究科石油化学専攻修士課程（竹本喜一研究室）を修了し、荒川化学工業に入社しました。当時は第2次オイルショックの厳しい経済環境の下にあり、就職難の時代でしたが、竹本喜一教授のご学友が荒川化学の研究部門のトップにおられた縁で、なんとか就職することができました。入社当時の荒川化学は、創業102年目を迎えた会社で、本社も歴史を感じさせるいわゆる「しもたや風」の店構えで、子供のときにテレビで見たコメディーク「番頭はんと丁稚どん」の舞台が思い出され、何かタイムスリップしたような感覚があったことを覚えています。しかし、当時から研究所には大学レベルの実験設備、最先端の分析装置や情報検索のツールが揃っており、「古いけど、新しい会社」という印象でした。当社の社名は、ロジンにこだわりつつももっと大きく事

業領域を展開していく思いもあって、創業100周年を迎えた1977年に「荒川林産化学工業」から「荒川化学工業」へ改称されましたが、ロジンは今でも再生可能な資源循環型のバイオマス原料として、環境にもやさしい当社の代名詞となる貴重な素材です。

入社当時から、創業100年を超える歴史を感じさせる社内行事が数々ありました。その一つに、毎年4月には、物故社員慰霊祭が執り行われていました。大阪地区在住の従業員約300名が参列し、ご遺族もお招きして、創業以来の物故社員の霊に感謝の念をささげ、ご冥福をお祈りするというものでした。その慰霊祭の講話に来られていたのが、当時の奈良・薬師寺管長の高田好胤師でした。荒川家と薬師寺とは、高田好胤管長の前管長であった橋本凝胤師と、当社が会社組織になった初代社長の荒川正太郎との不思議なご縁によりお付き合いが始まり、慰霊祭の壇上には、薬師寺・東塔（国宝）の先端にある水煙の拓本が飾られていたことも、私の記憶にしっかりと残っています。

私は奈良県出身であり、小さなころから近鉄橿原線の車窓から薬師寺の東塔を見るたびに白鳳時代の最高傑作とされるその荘厳な美しさに心惹かれていましたが、会社に入ってから薬師寺東塔の水煙の拓本を身近で鑑賞できるという機会にさらに縁を感じ、年に一度、慰霊祭で水煙拓本中の白鳳の天女たちの舞いと再会できることを心待ちにしていました。

その慰霊祭での高田好胤管長の講話の中で、今も最も心に残っている言葉が、「かたよら^{ない}心 こだわら^{ない}心 とらわれ^{ない}心 ひろくひろく もっとひろく これが般若心経 空の心なり」の一節です。三つの「ない」は、エゴイズムを打ち消すことであり、その先にこそ広々とした人間関係の世界が展げてくるとの教えでありました。それ以来、理不尽や不条理な事などで腹が立ったり、いらいらすることがあっても、この一節を唱えると不思議に心が安らぎ落ち着くことができます。

なお、この物故社員慰霊祭は、会社の規模が大きくなったこともあり、今でこそ全従業員が出席することはなくなりましたが、毎年、役員・幹部社員とご遺族代表が出席して継続しています。これも138年の歴史を支えてきた先輩たちへの感謝の気持ちを後世に伝えていかねばならない古きよき伝統であり、縁を繋いでいくことであると考えています。このように、私の就職のいきさつからその後の会社人生の中で、荒川化学との縁を深く感じ、その縁に生かされてきたものであると感じています。

前社長から昨年1月に、4月からの社長就任の打診を告げられました。私にとっては、全く思いもしない指名に大いに戸惑い、もちろん即答できずに回答まで数日の時間を頂きました。打診された日の夕刻、当社のOBで元専務の訃報が突然に入ってきました。元専務は当社の生え抜きではなく、1988年に大手商社から当社に役員としてヘッドハンティングで入社されました。製品開発についても当社が化学品中間体メーカーであったが故のプロダクトアウトの考え方から、マーケットインのものづくりの重要性を社内で広め、新たな事業の創生に尽力された方で、私もその方の下で厳しく鍛えられたものでした。私は社長への就任打診の回答をどうするべきか決心もつかないまま、2日後の元専務の告別式に参列した東京からの帰りの新幹線の中で、元専務に薫陶を受けた一つ一つの事柄を思い出しながら、ふと手帳に目をやると、そこには各ページに各界の人々が発信された心に残る言葉が記載されており、その中の「運は天から授かるもの、縁は自ら広げるもの」という言葉が目にとまりました。この言葉は、「サンモトヤマ」の会長の茂登山長市郎さんの言葉でした。「サンモトヤマ」は、1955年に銀座にブティックを構えて一流ブランド品の輸入販売を手掛け、日本へ世界の一流の文化をいち早く紹介した会社のようなのです。その銀座のブティックのお客様は、夏には軽井沢の別荘で過ごされる一流の方が多く、軽井沢では一流品のショッピングがままならないと聞いた茂登山さんは、軽井沢に別荘を購入し、カフェとブティックを開店し、夏場の1ヶ月のために採算度外視で、軽井沢の別荘で過ごされる銀座のお客様のための憩いの場を提供されたとのことでした。「運とは天から授かるもので、縁は自分からつくるものだ。煎じ詰めれば所詮、人生は誰に会ったか、誰と会えたかで決まってしまうと言っても過言ではない。運と縁とは、表裏一体のものであると思う。天から授かった運をいかに掴む

か、それをどれだけ感謝していただくか。そしてその運を生かすために、縁をどのように自らがつくっていくかが人生の決め手であると思う。」茂登山さんのこの言葉が、私の社長就任の決意を強く後押ししてくれ、当日本社に帰った後、社長就任をお受けするとの回答をしました。

社長就任内定後に、新聞等で私の社長就任報道に加え経歴や趣味が掲載されると、旧知の方々から多くの連絡を頂きましたし、社外でのパーティーに出席しても声をかけていただくことが多くなりました。

新聞等に掲載された私を表すキーワードは、「1955年生まれ、奈良県出身、大阪大学・工学部卒業、酒好き」等ですが、このキーワードに共通の方々や、関心を持っていただける方々とのご縁を広めていくことにより、自分自身の世界も広がってきたのではないかと思います。特に、大阪大学出身の方々は、学术界・経済界をはじめとする多くの分野で活躍されています。私にとって大阪大学卒という縁ほど、心強い縁はないと感じ、これを生かし、広げていくことで大きな力をもらったと感じています。

縁といえば、「袖触れ合うも多生の縁」ということわざがありますが、これは道で袖が触れるようなちょっとした小さなことでも、それは過去からの縁があって起こるものであり、すべては理由のないただの「偶然」ではなく、縁によって定められた「必然」であるとの仏教の深い教えであります。私は長らく、「多生」を「多少」と勘違いしておりました。一文字の違いによって、全く意味が異なるものになります。自分の不明を恥じるとともに、与えられた縁に気付く感性を持ち続けなければならないと感じています。

最後に、高田好胤師の説法に「手を打てば、はいと答える、鳥逃げる、鯉は集まる猿沢の池」という一節があります。手を打つという行いでも、お店の女中さんは何か用事かとお伺いに来る、電線の鳥は逃げて飛び去り、池の鯉はえさがもらえるものと集まってくるということです。手を打つという何気ない行いにも、いろいろな応え方があることを言い得て妙に表現したものです。人の話を聞いても、捉え方はその人それぞれ十人十色とも言えますが、自分勝手な考え方ではなく、自ら縁を広げるもっとひろいひろい意識を持って何事にも取り組んでいけば、更に大きな世界が広がり、運も授かるのではないのでしょうか。

(石油 昭和52年卒 54年修士)